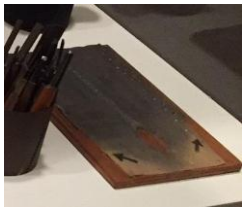
「生誕 100 年　清宮質文」の楽しみ方をいろんな人に聞く「清宮質文」の歩き方 ⑥

1 月 31 日で終了した「生誕 100 年　清宮質文」の歩き方。今回で最終回です！
まず「ノートでおしゃべりミュージアム」にお寄せいただいたご質問から…

「複数の版木をすった順番は？道具はどうやって使ったの？」　　《葬送の花火》→
輪郭線の主版（おもはん）をまずすり、そこに色版を重ねています。《葬送の花火》制作控をみると、
雲の流れ→バック 3 度すり→全体→地面 2 度すり→花火→徳利→花火の中心の順。

《さまよう蝶（何処へ―夢の中）》を 2 枚くらべると、する順番を変えて違う色にしています。
黒→緑か、緑→黒かで背景の色が違っています…　　《さまよう蝶（何処へ―夢の中）》→
桂の版木に刷毛で透明水彩絵具を塗り、越前和紙に自作バレンですっています。
鮫の皮は刷毛の毛先を割くために使っていました。絵具の含みがよくなるそう。　鮫の皮→



「娘が生まれて 10,000 日のごほうびに来館しました。何歳でしょうか？」（お母様）
計算苦手なので電卓でポチっとな…27 歳ともうすぐ 5 ヶ月ですね。おめでとうございます！
「またきてみたいよ1月 20 日」（せなちゃん） せなちゃんいくつかな？字が上手だね。また遊びにきてね。
「晩年ガラス絵が多いのはなぜ？」（初めて清宮さんを知った方）
間接的に描く版画だけでなく、直接描くガラス絵や水彩にも、手ごたえを感じていたのでは？
いよいよこれから油絵を描こうと、はりきっていらっしゃったそうですよ。

「《黙示》のしたたりは涙のしずく。受けているものは何でしょう!?」（詩人 S さん）
なるほど涙…するとただ流れさるのではなく、何かが、誰かが受け止めてくれると…
そういえば以前ノートに「イエス様のみ手」と書かれたお客様がいらっしゃいましたね。
《黙示》　　《深夜の蠟燭》

続いてはご感想をご紹介。
「時のうつろいや風や光や、過去も今の未来も、小さな方形の中にすべてがありました。」
涙といえば、《深夜の蠟燭》制作控に「涙」の文字をみつけてくださった方のご感想。
したたるしずくは涙。清宮さんがそう書いたのだから、きっと心の表現ですね。
「40歳でわかりやすい絵になったのに、70 歳で新しいわかりにくい絵になった。」（ご家族でお越しのお父様）
よくわかります！40 代のわかりやすいイメージが、よく知られている清宮さん。その先に行こうと努力されたのだと。
「挿絵のようにイメージが浮遊してくる感じは、ガラス絵や版画だからでしょうか？」（ご家族でお越しのお母様）
たしかに色を混ぜずに重ねていくから、浮遊感が生まれるのかも。《葬送の花火》制作控の最後に、
「花火の中心　白、カスレルヨウニ　軽く」とあります。絵では灰色がかってみえる部分。グレーと青を重ねた上に
さらに白を軽く重ねる。濃い色に白をかすれるように重ねるなんて、木版画のすりにしかできない技法です。
「白く濁らせている。澄んでいるのではなく、濁りの美がある」（木版画家、木村繁之さん）とおっしゃる方も。
続いてはご意見、ご指摘。
「《夕日の芽》は《夕日の茅》の間違いでは？」

するどいご指摘。そうなのです！よくみると鉛筆書きの文字は「芽」ではなく「茅」…
私たちが気づいた時には、図録の訂正が間に合いませんでした。申し訳ございません。
「茅」はもちろんモデルとなった黒猫「カヤ」のことですね。

「技法解説に主版で輪郭線をすり、色版を重ねるとあるけど、線は《暗い夕日(『暗い夕日』1)》くらいでは？」

《暗い夕日(『暗い夕日』1)》

たしかに！ご指摘は色版と線が重なっていないところにまでおよび**「線が朱色なのはなぜ？」**と。

…勉強不足です。スライドトークの山中現さんがおっしゃった**「空間を考えるとはモノとモノとのさかいめを考える事」**という言葉が思い出されました。線と色の関係って、絵の本質ですよね。

「《華やかなる孤独》英訳「Splendid Loneliness」より「Magnificent Solitude」の方がニュアンスが近いのでは？」

（O さん）

英語の素養がなく返す言葉もございません。お教えいただきありがとうございました。

《華やかなる孤独》

「人間は幸せですか、などと文学的なことばを安易に使うより、もっと不世出の木版画家であること、生誕 100 年記念のこれまでにない最大級の展覧会であることをアピールすべきだったのでは？」

生誕 100 年記念展として空前絶後の展覧会であることは、もっと宣伝すべきでした。今更ながら反省しきりです。

「人間は幸せですか」ということば。関係者の皆さまからも賛否両論でした。たしかに熱心な愛好家の方ほど、

「なくもがなのことばだ」「なくてもよかったかな」と手厳しいご意見をいただきました。私もそう思います。一方で、

「人間は幸せですか？」というキャッチコピーにひかれて見に来ました。」

「人間は幸せですかのフレーズが疑問でしたが、1 階に展示されていた「雑記帖」に答えがありました。時空を飛び越えるはるかな目線を感じます。」といったご意見が、清宮さんを初めて知る方や若い方から寄せられました。

「あなたは？わたしは？ではなく、人間は？と問われて立ち止まらされる。問うているのは誰なのかと…」

とのご意見も。まず「夢のモニュマン」という文章にある清宮さんご自身のことばだという説明が必要でしたね。

それをご存じの上で**「文脈を無視してコピーとして軽々しく使うべきではない」**というお叱りも受けました。

大事なことですので、担当としてどんな気持ちでこのことばを引用したのか、最後に記しておきたいと思います。

絵にことばなどいらない。私も同意見です。清宮さんのことばをコピーとして引用した安易さは反省しています。

私はまずポスターやチラシで、清宮さんを知らない方に「？」と立ち止まっていただきたかったのです。

それがきっかけで来館された方もいて嬉しい半面、広告業界の方からはコピーとして弱いとダメ出しされたり…。

コピーとして使うのがふさわしいことばだったか、使い方がふさわしいものだったか。反省するばかりです。

けれどコピー以前に、このことばが私にとって展覧会の重要なテーマだったのです。原文「夢のモニュマン」をお読みいただければと思うのですが、森の中に人知れずたたずむ枯れ木のように、数百年経って通りがかる人に、自作から「どうですか、人間は幸せですか」と問いかけてみたいと。ここには二つの夢が語られています。自作が数百年後残されているという夢。それからそれはもう清宮さんのものでなく、誰のものでもない。だから誰のものでもあるという夢。ご自分をできるかぎり引き算していって「人間は幸せですか」と語りかけたかったのだろうと思います。宮澤賢治の「みんなのほんたうのさいわひ」のように、できないとわかって、それでも念じずにいられない、伝えずにいられない。表現の孤独を、そして可能性を知るべきだと思うのです。「幸せですか」という問いには、幸せであることと、幸せでないことが同じようにこめられている。当たり前のようにそれができると信じるのでもなく、無理と初めからあきらめるのでもない。無理と知ってなお、伝えることを夢みること。それが人間の表現なのだと思います。そしていつか森の枯れ木や、路傍の石や、真夜中の海原に人知れず降る雨のように、もう人の手になるものでなくなったとしても、人に語りかけたい。自分の表現はそうありたいという祈り。それこそ清宮さんが生涯をかけた詩想なのだと思っています。